

(特別号)

第32号

駒の館だより

平成24年12月12日 発行
明治国際医療大学附属図書館
〒629-0392 京都府南丹市日吉町
TEL 0771-72-1181 (代)

目 次

巻頭 挨拶

図書館長 樋口敏宏

第二回読書感想文コンクール入賞作品

『最優秀賞』（館長賞）

鍼灸学部1年 中尾麗花

『優秀賞』

看護学部1年 宮崎雅子

『優秀賞』

鍼灸学研究科
博士前期課程2年 芝 貴洋

第二回読書感想文コンクール応募者

院 生 加藤慎吾・島山奈緒子・新船敬洋・高橋信博・竹林智彦・早水丈治
学部生 浅草大將・井田佑二郎・井上舞香・岩崎大輔・河野将也・小針亜九
清水優花・高田真弓子・土屋慧典・中川貴久美・中川知彦・永田直美
原 智美・原田涼平・南 大智・宮永健一・横坂 唯

(五十音順)

第二回読書感想文コンクール

実行委員 田口大輔

巻頭挨拶

附属図書館長 樋口敏宏

今年も昨年に続いて 2 回目の読書感想文コンクールを開催することができました。昨年の 3 篇に較べると本年は学部学生から 19 篇、大学院生から 7 篇の大変多くの応募を受けることができました。大変うれしく思います。応募していただいた学生、院生の諸君をはじめ、応募を奨励していただいた教員、クラブ指導の先生方に心から感謝申し上げます。最優秀賞 1 篇と優秀賞 2 篇を選考して、駒の館だより特別号として発表させていただきます。多くの作品の中からの選考は激戦となり、選外となった作品との差は僅差でありました。

今後も読書を通じて医療人としての豊かな教養と知識を身につけていただくために、読書感想文コンクールを続けていきたいと思っております。

《 最 優 秀 賞 》

『 卵 の 緒 』

著者：瀬尾まいこ（新潮文庫）

鍼灸学部1年 中尾 麗花

家族の形、定義とはいったいなんだろう。例えば、血がつながっている。例えば、同じ屋根の下で暮らしている。この本は、血の繋がりにスポットを当てた家族の話である。『卵の緒』は「僕は捨て子だ。子どもはみんなそういうことを言いたがるものらしいけど、僕の場合は本当にそうだから深刻なのだ。」と九歳の少年の独白から始まる。学校で育生が、へその緒の話を書く場面がある。ついに長年にわたった育生の捨て子疑惑を明らかにするときがきたのだ。育生は母に、へその緒を出して欲しいと頼んだ。しかし、母が持ってきたのは、へその緒ではなく、卵の殻だった。・・・僕は捨て子だったのだ。育生と血縁のない母が、へその緒と言い、息子に示した「卵の殻」。私はこの「卵の緒」が愛おしいと感じた。今という時代を共に生きる新しい家族の象徴だと思うから。育生の母がそのときに言った言葉は、私をととても温かい気持ちにさせた。こんなにまっすぐ「あなたを一番愛している」と子どもに伝えることの出来る母親っているのだろうかと思った。そして、暗い場所にポッと明かりが照らされたような気持ちになった。『卵の緒』の設定は、決して明るいものではない。一見、辛い運命を背負っている登場人物たちの日常が、自然と、ほんわかと、ちょっと切なく淡々と描きあげられている。それなのに、心が揺さぶられる。後に、育生は、たった一瞬の間に、自分に関する様々な事を知る。だが、なぜか育生には大きな驚きはなかった。どうしてだろう。理由は分からない。悔しいのか悲しいのかさえ分からない。それなのに涙がでる。憎しみもなければ、恋しさもない。それなのに、父親が死んだときに妙に納得したり、隔たりの答えとして事実をすんなり受け入れてしまったり。読み進めていくうちに、時折、はっきりしない感情や時に身を任せる場面が出てくることに気が付いた。そしてこのとき育生は、感動したというよりは、なにかもっと掴みどころのない、言葉にし難い特別な何かを感じたのではないかと思った。私は、時々自分のつたなさを嫌悪し、他愛のないことに感動する。そんな時、進歩のない自分に驚く。

でも、『卵の緒』を読んだとき、進歩しなくてもよい領域があるのかなと思うことが出来て、気持ちが軽くなったような気がした。『卵の緒』では、再三再四、食事風景が出てくる。思えば、私の家では皆で食卓を囲む機会が以前と比べて減っていた。それと同時に、家族で会話をしたり、何かを一緒にしたりすることも無くなっていることに気付いた。人は、人と人との繋がりの中に努力があることを好まないように思う。「人間関係が面倒だ」と言う。人と繋がることの尊さ、幸せを、人はもっと理解しなければならないのかもしれないとこの本を読んで感じた。また、愛情とは何かと考えたとき自分のこれまでと重ねることがあった。振り返れば今まで「あなたのためだ」と躰、規則を教えられてきた。大切なこととは理解できる。だが、それを破りたいと思い、息苦しいと感じてしまうことがあった。しかし、『卵の緒』はそうではない。遅刻すらしたことのない真面目な育生に対して、「今日は休みにしましょう」と仮病を使わせるような性格の母さんが私には面白く、好感を持った。『卵の緒』では、心に響く言葉が沢山でてくるが、この場面で出てくる私のお気に入りの言葉がある。「たまには外れたことをしてみないとものの重要度が分からない。たいしたことないってことも、大切だってことも破ってみないと分かんないのよ。」という言葉だ。家族とは何なのか。『卵の緒』を読んで思ったこと。それは、家族とは、「愛」があること。それだけで成り立つものなのだ。そして、親子の絆は、へその緒でも卵の殻でもない。もっと、握みどころがなくとても確かなものであるということだ。家族といっても、人と人との絆、その名前にすぎない。血がつながっていなくても、育生と母、君子は結ばれている。どんな家族がどんな結び方をして、そこに愛があればいいと私は思った。知り合った者同士が、家族が寄り添い、新たな家族を築こうとする。戸惑いながらもそこに少しずつ関係が創られる。とても素敵なことだと思った。読み終えた後、なんとも言えず、優しくて寂しい気持ちになり、私はしばらくぼーっとしてしまった。私たちは、誰かと繋がる機会が度々ある。心地よい関係に身を置くこともできる。ゆったりと流れる時間の中で、まずは出来るだけ食卓を囲むことにしよう。

《 優 秀 賞 》

「明日もまた生きていこう」
著者：横山友美香（マガジンハウス）

看護学部 1年 宮崎雅子

「自分は何不自由なく暮らすことができ幸せだ」と、そう思って生きている人はどれだけいるだろうか。五体満足で、毎日学校に行くことができ、学びたいことが学べる。それが幸せだと感じて生きている人がどれだけいるだろうか。私は、毎日何不自由ない生活をおくれていることが当然のように思っていた。しかし、それは当然なんかではない。この先未来のことは誰にも予測できず、いつ病気にかかるかも分からない。そんな中で健康に暮らして、ご飯を食べたり、勉強をしたり、スポーツをしたり、今まで普通だと思っていたことは幸せなことだとこの本を読んだ今、思えるようになった。

この本の著者の横山友美佳さんは、全日本女子バレーボールチームなどで活躍する木村沙織選手の後輩であり、親友でもあった。私が横山さんを知ったのは、木村選手の全日本合宿中に親友が亡くなったと当時ニュースになったからである。そのときは「どうして選手の親友が癌で亡くなってニュースになるのだろう」と疑問に思っていた。でもすぐに、横山さんも木村選手と同等の実力があり、将来有望な選手だったことを知り、納得したことを覚えている。もし、横山さんが癌にならなかったとしたら、今も元気にバレーボールを続けられていたとしたら、木村選手と並んで世界と戦うコートに立っていたかもしれない。しかし、病気は横山さんを選んだ。アテネオリンピックの代表候補に名前があがった矢先の「がん宣告」。それがどれだけ辛いことだったか。もうバレーボールができないかもしれないということが、どれだけ絶望的だったか。それは本人にしか分からないことだろう。実際に「死にたい」と思ったこともあったと書かれている。それでも、横山さんは明日も生きるために、つらい抗がん剤治療を受け続けた。もし、私が今がん宣告を受けたとしたら、横山さんのように前向きに治療に専念できるだろうか。治療を受けたとして、髪が抜け落ちたり、食べ物もろくに食べられなくなったりする生活に耐え切れるだろうか。そんなに辛い思いをするなら、私は死んで楽になりたいと願うかもしれない。

しかし横山さんは、そんな絶望の淵に立たされてもなお、「早稲田大学合格」という新しい目標を掲げ、どんなに苦しい抗がん剤治療にも耐えていた。バレーボールでオリンピック出場は無理でも、新しい夢が生きる原動力になっていた。自分のためだけではなく、周りで支えてくれている家族や、病院の先生、看護師など全ての人に感謝し、そんな人たちのために明日も生きていと願う横山さんを知り、私は人として本当に尊敬できると感じた。それと同時に、私は今までどれくらいの時間を目標や夢なしに無駄に過ごしてきただろうと悔やんだ。目標があるから人は頑張れる、そして支えてくれる人のために頑張らなければいけないと、私は再認識した。生きるということは、目標を持ち続けるということ。本の中のこの言葉が深く心に残った。大きな目標じゃなくていい、小さな目標でもいいから、その目標に向かって毎日必死になれることが生きているということなのだと学んだ。

だが、生きるのがつらいからと言って、自ら命を絶つということも今日ではよくあるニュースだ。横山さんは「命を捨てるなら私にください」と言っている。明日も生きていと願って亡くなっていく人が横山さん意外にも大勢いるだろう。そんな人たちの前で自ら命を絶つという行為は許されるのだろうか。私も少しつらいことがあったときに「死にたい」と口にしたことがある。しかし、そんな言葉は軽々しく使っていないものではない。つらいことから逃げるのは簡単で、つらくても苦しくてもそれに耐えられる強さが必要である。闘病生活を送っている人は、その強さを誰よりも持っているのではないかと感じた。

私は横山さんから、2つのことを学んだ。1つ目は「目標を持って生きること」である。どんなに苦しい状況でも夢を追いかけ続け、ひとつひとつの夢を叶えるために努力を続けることで着実に夢に近づいていけることを横山さんは証明した。そして2つ目は「何事でも感謝する心」である。小学生のときから「感謝する気持ちを忘れるな」と言われてきたから、自分の支えになってくれている人たちに感謝しているつもりだった。しかし、それでもまだまだ感謝が足りないことに気付かされた。今、この一瞬を生きていることにできても感謝していかなければならないと、本当にそう感じた。

私は今、健康に過ごせることが幸せだと思えるようになった。しかし、これから先のことは何も分からない。だからこそ、目標を持ちその目標に向かって努力を続けたい。命は自分ひとりのものではないけれど、私は自分の人生に悔いのないように、無駄にならないように、一生懸命に生きていきたい。

《 優 秀 賞 》

「大学時代」自分のために
絶対やっておきたいこと

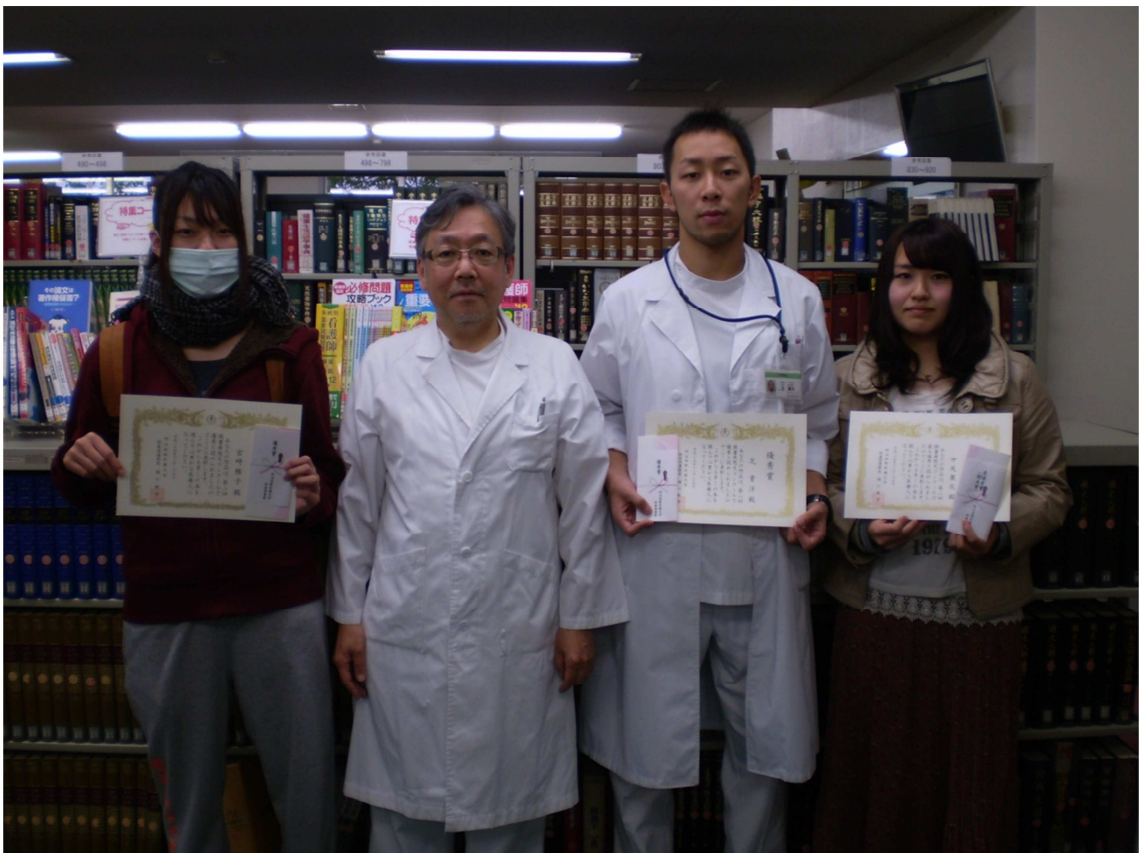
著 者：千田拓哉（三笠書房）

鍼灸学研究科 博士前期課程 芝 貴洋

この本を手にとったきっかけは、残り数ヶ月となった大学時代と呼べるものをさらに有意義に過ごすヒントがあるのではないかと思ったからである。私は4年間の大学時代を終え、大学院へ進学することを選んだ。この延長した2年間の大学時代を、あと数ヶ月で終えようとしている今、何かやり残したことはないか、まだやれることがあるのではないかと自問自答しながらこの本を読んだ。この本を読んだ最初の印象としては、大学時代の日常生活を送るうえで意識しておくの良いこと、ピンチの時に助けになる言葉や迷った時に後押しをしてくれる言葉があるということだ。自分が日頃心がけているようなこともあり、著者の考えに共感できる場面もあった。特に印象が強かったのは挨拶に関することである。私は小学生の時に始めた柔道を今でも続けている。柔道は「礼に始まり礼に終わる」と言われるように、相手を敬い礼法を重んじるため、柔道を始めたころから挨拶は意識していた。それが高校時代に入りさらに意識するようになった。それは高校時代に、ある先生から「挨拶を待つのではなく、大きな声で自分からしなさい。挨拶をされて嫌な顔をする人はいないはずだから。」と教わったからだ。本書の著者も「自分が先輩だから、後輩が挨拶するまでじっと待っているなど、バカらしいことだ。もし、会っても挨拶してこない後輩がいたら、自分から挨拶し、先輩から先にさせてしまったことを気づかせてやればいい。」と述べている。挨拶に上下関係など関係ない。確かに後輩から先輩に挨拶するのが通常だが、気づいた方からすれば良いと思う。また、著者は「目を合わせてから2秒以上経過すると、もう自然な挨拶にはならない。挨拶はタイミングが命だ。」とも述べている。「挨拶」ができるかどうかは大学時代のみならず、社会人としても、1人の人間としてもとても大切なことだと私は思う。また、本書では家庭教師をすることについても書いている。私は2年前から家庭教師をしている。最初は自分の得意な教科を教えるのだから簡単だろうと考えていた。

しかし、自分では理解していることでも、他人に教えるということがいかに難しいかを知った。著者も「家庭教師では、生徒に教えながらも、自分が教わっていると気づく。」と述べている。確かに家庭教師を始めてから、教えるということの難しさや、わからないことは何なのか、どうすればわかってもらえるのかなど、教えている自分も教わることが多い。さらに著者は「就職の面接官と同世代の生徒の親たちと会話できるのは、何よりもいい経験であり、特権だ。」と述べている。勉強の進行状況や内容の理解度などを、親御さんに伝える時は社会人相手にビジネス上の付き合いをしていると考えると身が引き締まる思いがする。私は、この経験がこれから先、鍼灸師として生きていく上でとても役に立つと思っている。私たち鍼灸師は東洋医学の知識を用いて治療することが多い。東洋医学の用語など鍼灸師同士ではわかることでも、患者さんにとっては聞き慣れない言葉や理論が多い。患者さんからの問いかけに対して、我々が普段使う用語を用いても理解しがたいだろう。そこでいかにわかりやすく説明できるかは、患者と治療者の信頼関係につながると思う。本書を通して、現在の自分と重ね合わせて考えられるところも多かったが、現在の自分に足りないものや、この先やっていきたいことも見つかった。そのひとつは本書の著者が主張している「中途半端な海外旅行をするなら、47都道府県すべて制覇してみる。」ということだ。以前は、学生の頃しか時間がなく、お金を貯めて学生時代に海外へ行ってみたいという気持ちが大きくあった。しかし今は、ギリギリで行ける中途半端な海外旅行をするのなら、まだ行ったことのない都道府県へ行く方が、味のあるよい旅ができるのではないかと考えている。47都道府県を制覇しておくことで、この鍼灸師という仕事柄、どの土地の方が患者さんとして来ても話題に困らないのではないかと思う。私は趣味で登山をしている。山に登ることも好きだが、温泉やその土地のものを食べることを含めて、ひとつの旅行として楽しんでいる。私は20代のうちに登山を含め47都道府県を巡ろうと思う。日本にもまだまだ知らない土地がたくさんあり、もっと自分の住んでいる日本という国を知ることのほうが重要ではないかと思った。今回この本を読んで残り少しの大学時代にできること、やっておくことに気づくことができた。また、残りの大学時代だけではなくこれからの生き方や、日々の過ごし方のヒントを得ることもできた。来年は就職し、社会人となる。この大学時代と呼べる時間が残り数ヶ月となった今、できることは限られているかもしれないが、悔いのない時間を過ごしたいと思う。

第二回読書感想文コンクール 表彰者記念撮影



写真（左から宮崎さん、樋口館長、芝君、中尾さん）